

2016年3月・季刊53号

# ミンダナオの風

発行：ミンダナオ子ども図書館 松居友



こちらの子たちを見ていて思うのは、男の子も女の子も、本当に家族思いで自立していることだろう。

男の子達は、父さん母さんが

山の畑に働きに行くときは、

長男はいっしょに行き、

次男三男は、料理するための枝を拾ったり

おかずの力エルを探したり・・・

女の子達は、下の子の面倒をみたりする。

よくあんな小さな体で、

おんぶしたり、だっこしたり、

ときには、片手で抱きかかえて

もう一方の手で、

水くみのバケツを運んだり！

そして驚くべき事は、嫌々やっている感じが無く

その表情が、しっかりしていて、しかも明るい。

ときには、子どもを抱っこしたまま、

友だち同士で遊んでいる。

そんな子どもたちの様子を見て

日本から来た若者たちは、驚きの声をあげる。

「こちらの子どもたちは、本当に自立している！」

小さいときから、妹や弟の面倒をみるから、

自然に家族愛、兄弟姉妹愛がやしなわれ

ちまたでは、友情が培われていく。

それこそが、生きる力の根本だ。

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップに応募する子たちの90%が、応募理由をこう語る。

「わたしが、がんばって、学校を卒業して

少しでも良い仕事に就きたいの。

そして、家族を助けたい！」

## 思った以上に日本の子どもたちの感性は素晴らしい2 松居友

日本の子どもたちの感性が素晴らしいのに、引きこもりや自殺が多いのはなぜだろう？

日本に滞在しながら観察して気がついた大きな原因の一つは、伝統的な遊びが「ちまた」から消え去ったことだ。勝ち負けを決める競技やゲームではなく、ハンカチ落としや花いちもんめといった、楽しい中で友情を培っていった伝統的な遊びが、家でもなく、学校、保育園、幼稚園でもない「ちまた」で盛んに行われていけば、引きこもることともなく、友だちどうしで誘い合って友情や愛を培える。MCLのように、絵本もちまたで楽しめば良い。読書だけではだめだろう。

ミンダナオの子どもたちが、生きる力を持っている根本は、遊びが「ちまた」にあるからだ。しかし、日本のように、ちまたに遊びが無い場合はどうしたら良いか。学校の体育や休み時間に、伝統的な遊びを教えれば良い。

多くの体験では、小学校の体育の時間や休み時間や放課後にも、先生の推薦で、缶けり、石けり、独楽回しから独楽鬼までやった。そこから、さらに「ちまた」で友だちと、もっと遊んだ。

## 家に帰りたい 宮木 祥

木の下で、彼がギターを弾いている。明け方の空気はまだひんやりとしていて気持ちよく、太陽の光が朝もやにキラキラしている。台所からは煙が上がり朝ごはんまでもうすぐで、今日も晴れて暑くなりそうだ。

「アズサ、歌って」

「ブラウンカン？」

「うん、ブラウンカン！」

私が彼のギターで歌える日本の歌は、ザ・ブルー・ハーツの「青空」だけで、私たちはこの歌を、歌いだしをとって「ブラウンカン」と呼んでいる。

子どもが、自分のためにギターを弾いてくれる生活。

13歳の男子の奨学金を支援して半年になる。学年が遅れていてまだ小学5年生をしている彼は、10歳くらいにしかみえない。彼の里親になる前、ハラナ（夜明けのバースデーセラナーデ）のときに、たしか見た目より大きかったはずだと思い、「12歳になつてんな？」と聞いたら、「ううん、僕、ちっちゃいけど13歳になつてん」と言われてしまった。

彼は学校から帰ると、夕食までひたすらバスケットボールをしている。ギ

ターが大好きで、明るくて屈託がなくいつも楽しそうで、平日は朝食の前いきちんと水浴びしてくる。彼が泣いたのを見たのは、兄が山の高校に転校するのを見送りに行った時だけだった。

1月の半ば、彼は、私の使っているICレコーダーを気に入って、毎晩のように自分やお兄さんたちのギターの音や歌を録音しては、それを聴きながら眠っていた。

ある朝、昨晩は何を録音したのかと再生してみると、いつもと様子が違う。コンピューターに耳を澄ませると、しくしく泣いている。

「…なあ、帰ってもええ？ 2月になったら、もう帰りたい…。ねえ、帰りたいねん…。なんで帰ったらあかんの…？ …お父ちゃん、お母ちゃん、兄

ちゃん…、帰りたい、帰りたいよ…。神様、なんとか助けて下さい…。お願いします、神様…」

私にはもう一人、8つになる里子の女の子がいて、彼が知ったら怒るかなあ、と思いつつ、

「な、これ、聴いてみて。兄ちゃん、帰りたいって泣いてるねん。かわいくない？」と、彼女にレコーダーを差し出す。他の女の子たちもワイワイ寄って来て、聴きながら何て言っているのか口々に教えてくれる。

「ほんまや、泣いてるー。かわいい！」「これ、泣きまねじゃなくて、ほんまに泣いてるん？」

「あ、今、お兄さんの写真にキスしてる。彼のお母さんは、死んでしもてんな」そういう彼女たちだつて時々、家に帰りたくて泣いているのを知っている。寝る前に毛布にくるまって、すすり泣きが聴こえる。私たちは「彼女は今日、寂しいねなあ」と、そっと側にいる。次の朝、泣いていた子は恥ずかしそうに目を伏せて、「心配かけちゃった？あんな、おばあちゃんが恋しかっただけやねん」などと言ってくる。

家に帰りたいと泣く彼の声はいじら



しく、胸をきゅうっと切なくさせるの  
だけども、その素直さは絶滅した。ド  
ー鳥に出会ったように、私を下キド  
キさせた。

家に帰りたくない人を知っている。  
アラカンの山の奥の、また奥の村出身  
のマノボのスタッフは、クリスマスに

一昨年は3日、昨年は一週間しか戻ら  
なかった。村で初めて大学を卒業した  
その青年は、故郷は居心地が悪いのだ  
そうだ。それでも、両親や兄弟姉妹が

待っていて、息子の現金がないとクリ  
スマスの準備ができない。だから、帰  
らなくてはならないのだ、と言う。

私の奨学生は、学校が遠くても、食  
べるものが芋やバナナばかりでお弁当  
が持っていけなくても、山に帰りたい、  
お父さんや兄弟に会いたい、と泣く。  
それが嬉しかった。

1月末、スタッフが、泣いていた彼  
の村の方を回るときに、頼んで一緒に  
連れて帰ってもらった。ハウスペアレ  
ントさんに、学校の先生に渡すための  
「今日、欠席します」という手紙を書  
いてもらう。アラカンの、その村に入  
る川の手前で、彼は四駆から跳んで降  
りた。村の遊び友達らしい男の子が2  
人駆け寄ってきて、3人であつという

間に川をトントンと渡り、その先の小道  
へ消えてしまった。私たちは、その地区  
の高校と小学校を回り仕事を済ませ、夕  
方、彼を拾ってMCLに帰った。家で、  
お父さんや兄弟とどんな風に過ごしたの  
かは聞かなかった。聞けなかったのかも  
しれない。

次の日、彼にお土産に買っておい  
たピーナツを渡しに行く。山育ちの彼は  
ピーナツが大好きで、私はそんな彼を見  
ているのが好きだ。

彼が、にこにこつと笑って言う。  
「ありがとう、アズサ。僕、彼女作らへ  
んからな」

突然、何を言い出すのかと思う。唐突  
すぎて、理解ができない。  
「あんな、僕、家に帰りたいから、  
MCLで彼女が出来てもいいと思っ  
て、ずっと思ってた。でもな、卒業まで、  
彼女を作った家に戻されればいいっ  
て、ずっと思ってた。でもな、卒業まで、  
がんばるから」

ああ、そういうことかと、小さく笑っ  
てしまった。お正月明けにMCLに戻  
て来た時に、別の子が、「秘密やねんけど、  
僕、帰省先で好きな子できてん」とうれ  
しそうに言うので、側にいた彼にも「自  
分は好きな女の子、おらんのか？」と聞  
いたら、「そんな、おらん！」と言っ  
ていたのに、子どもなのか大人なのか分

からない。  
私は、彼に好きな人ができて結婚  
して奨学生を止めることになっても、  
ちっとも構わない。ただ、私たちは本  
当の家族ではないので、彼が奨学生で  
なくなればきつと会えなくなる。それ  
が寂しい。

夕方、学校から帰ってきた彼が抱き  
しめてくれる。髪を立てて格好つけて  
いるけれど、抱きしめる手はまだ小さ  
くてあどけない。

「ただいま、アズサ！」  
「おかえり。今日も一日、楽しかった？」  
「アズサ、明日、料理当番だから3時  
50分に起こして」

「3時50分!? 早すぎへん？」  
「僕、男の子やからご飯炊く係りなん  
やけど、やっぱり早すぎるかなあ...  
じゃあ、3時55分！」

次の朝、世話が焼けるなあ、と思う  
よりも、いつまでそうして甘えてくれ  
るかなあ、と思いつつ、真つ暗な中  
を起こしに行く。懐中電灯で、ベッド  
を覗く。  
「おはよう。3時55分、ロト(料理)  
やで」  
「うー。んー。ありがとう、アテ(お  
姉さん)・アズサ」

この子は、何かしてもらったら必  
ず、「ありがとう、アズサ」と言うなあ、  
と気付く。お父さんか、亡くなったお  
母さんが教えてくれたのだろう、と彼  
の故郷を想う。

今朝も、木の下で彼がギターを弾い  
ている。

「アズサ、歌って」

「ブラウンカン？」

「うん、ブラウンカン！」

泣いてしまうほど恋しい家と、会  
いたい家族のいる彼は、幸せだ。

帰りたい家に帰らず、彼が側にい  
てくれる自分も、幸せだ。



## お話の生きている社会とは

松居 友

ほくにとつて、長いあいだのひとつ  
の課題は、心にお話が生きているとい  
うことの意味がどこにあるかというこ  
とだった。

(註・『わたしの絵本体験』『昔話と  
こころの自立』『昔話の死と誕生』(教  
文館)などの作品で書いている。)

お話の生きている社会と生きていな  
い社会では、社会の豊かさ、とりわけ  
そこで生活している子どもたちの心の  
豊かさが違おうとおもう。



お話には、子どもにかぎらず、人間  
の心を救う力があるとおもう。

それが真実であるとするならば、  
人々の心にお話が生きている社会と  
は、どのようなものなのだろう。

長いあいだそうしたことを考えてき  
て、本も書いたけれど、ミンダナオに  
いって、ぼくは初めて、お話の生きて  
いる社会とはどういうものがわかっ  
てきた。

お話の生きている社会は、かならず  
しも絵本や童話が出版され普及してい  
る社会ではない。

また、「読み聞かせ」や図書館活動  
がさかんな国でもないと思ふ。  
「読み聞かせ」活動を積極的に提唱  
し推進している国は、先進国とよばれ  
ているお金によゆうのある国々だ。

歴史的にみるならば、産業革命が進  
行した西欧で出版がさかんになり、ア  
メリカにうつり、とりわけ「読み聞か  
せ」活動は、英米が中心になって図書  
館活動のいっかんとして世界に展開し  
ていった。

グリムなどの民話の採集もどうよう  
で、こうした活動が近代文明の発達と  
へいこうしておこわれていく理由は、  
視点をかえるならば、近代化にぎやく  
こうして、民話を語る古老がきえてい

き、古くから語られつづけてきた昔話  
が失われていく、それに危機感をいだ  
いた人々が、民話を収集し童話として  
出版し、さらに「読み聞かせ」を推奨  
しはじめたとかんがえられる。

つまり「読み聞かせ」が活動として  
復旧している先進国は、現状として近  
代化のながれのなかで語りがすたれ、  
人々の心からお話がうしわれ、心の貧  
困がひろがりはじめた国だといえる。

その危機感から、民話が収集されて  
童話となり、さらに絵本となって意識  
的に「読み聞かせ」活動がはじまった  
というのが、真実だろう。

絵本の「読み聞かせ」や読書が普及  
しているのは、お金のある人々のあいだ  
だけで、これは、フィリピンでもどうよ  
うだ。

フィリピンには、公共図書館もほと  
んどないし、絵本を売っている本屋は、  
大都市のデパートのなかだけで、それ  
をやるのも一部の金持ちにかぎられ  
ている。ミンダナオ子ども図書館のあ  
るキダパワンにも、本屋はほとんどな  
く、まして絵本などにもない。

初めてきたころには、そのあまりの  
ひどさにショックをうけて、ミンダナ  
オ子ども図書館をはじめたけれども、  
数年たつとだんだん絵本がばかばかし

く見えてきた。

なぜなら、ここには絵本はないけれ  
ども、先進国の数倍も、お話の力その  
ものが生きている社会だったから。

絵本や本がなくても、お話が生きて  
いる社会はある。むしろ、そうしたも  
のがない社会の方が、お話が生きてい  
ることが多いかもしれない。たとえば、  
ここの山の子どもたちは、だれでもお  
話を語れる。なぜなら、民話を聞いて  
そだっているから。

お話が生きている社会か否かの判断  
の基準は？と聞かれると、今はこう答  
えることになっている。



「そうですね。お話の生きている社会の人々は、見えない物を信じています。見えない物とは、神の存在もあるけれども、とりわけ妖精や精霊、化物や幽霊、自然界の不思議なスピリットの事。

このあたりに住んでいる人々は、子どもたちはもちろんのこと、大人たちも、妖精や精霊の存在を信じているんですよ。彼らにとって、周囲のみわたせる世界は、人間と精霊がともにすんでいる世界なのです。」

じじつミンダナオの人々にとって、いっぽ家からふみ出し、とりわけ自然のこの山や川や岩のある場所にはいると、そこは妖精の世界である。



だからミンダナオ子ども図書館の若者や子どもたちも、しばしば妖精についてかたっている。

図書館の敷地内には、アポ山の噴火で飛ばされてきた火山弾とおもわれる大きな岩があるけれども、いぜんから村人はそのなかには妖精がすんでいると語ってきた。とりわけ夕刻に、その岩のそばをとおるときには、岩にむかって声をかけるのが習慣だ。

「ちょっと、ごめんさいね、通してね・・・。」

その岩は、妖精たちの家だといわれているし、なにか気配をかんじるのだろうか。

ミンダナオ子ども図書館の土地をゆずってくださったのは、お隣さんのインカルさんだ。インカルさんは、理事をやってくださいっていたが、亡くなられた。お父さんが、初代のキダパワン市の市長で、マノボ族の酋長だった。

そのころキダパワンには、マノボ族しかすんでおらず、ミンダナオ子ども図書館のある場所が、神聖な中心地で、ある特別な日になると、敷地内の妖精の家とよばれている岩のまわりに亡くなった先祖たちがあつまって、集会を開くのだとおしえてもらった。

インカルさんを中心としたマノボ族は、けつきよくそのご自給地を奪われ、

山のおくへとうつっていった。ただし、インカルさんのお孫さんたちや、親族たちは、貧しいけれども川のふちに家をたてて今でも何とか暮らしている。

子どもたちも三食たべられなかったりするので、ミンダナオ子ども図書館でご飯を食べられるようにしてあげているし、何人かはスカラシップをあたえて、大学までいけるようにしてあげている。

話はそれたけれども、ほとんどの人は、大人も子どもも妖精やお化けをしんじて生活している。とりわけ大木は、ほとんどが妖精のすみかで、ときどき白い女性がたっているといわれ恐れら



れている。それは神木のようなものであり、切ってはならない。

### 向こうがわの者が聞いている

ミンダナオ子ども図書館で子どもたちに、見えない世界の話を聞くと、いろいろな話や体験談を語りはじめてつぎることがない。

「わたしね、もつと小さかったころ、夜へやのなかでおきたらね。こびとたちにあつたの。」

「ぼくは、学校のかえりに山道を歩いていたら、大きな巨人がたっているのを見たよ。」

よく話題にのぼるのは、ワクワクとよばれる人間の姿をした妖怪のことだ。この妖怪は、ふだんは人間の姿をしていて人とみわけがつかない。

「でもね、夜になると、大きな木の下で体のはんぶんが離れてね、羽がはえ空をとぶんだよ。そして、月夜のそらにのぼって行って、ワクワク、ワ



**講演会、報告会、家庭集会の以来は、松居友へ**

mcltomo@yahoo.co.jp (松居友へメール)

電話番号：080-4423-2998 (日本国内から現地に転送・松居友)  
09219603640 (現地携帯電話フィリピン使用・松居友)

クワクワってなくの。」

「そうそう、わたしもきいた。」

「きのうの夜、ないてたよ！」

「ミンダナオ子ども図書館、妖精の多い場所なんだよ。あそこの岩のところにあつまるんだって。」

ときどき、夜になにかがないていると、子どもたちがいう。

「あつ、クワクワだ！」

そして、ぼくにだきついてくる。

「クワクワって、屋根にのると、ふいてあるヤシの葉っぱのあいだから舌をのぼして血を吸うの。なぜか妊婦がだいすきで、クワクワに血を吸われた人の子どもは、クワクワになるの。」

サマールのそばのある島の人々は、



半分いじょうがクワクワだそうだ。魔術的な力をもっているから、ときにはマナンバルのように、病気をなおしてくれたりもするという。

これは、じっさいに体験したことだけれども、深夜の山の民家に泊めてもらったことだ。

小瓶に石油をいれて芯をだしたところに火をつけて、明かりをともし、夕食をたべた後に、ぼくはいつた。

「昔話をしていただけですか？」

「よいですよ。どんな話がききたいの？」

「インカント（妖精）の話・・・。」

ところが、インカントという言葉で発したしゅんかん、まわりの人たちは顔色をかえた。

「シッ！」

「どうしたんですか？」

「だめ、その言葉をいっちゃダメ！」

そういつてすぐに指示をだした。

「ちょっと、そこ扉を閉めて。それから、そっちの窓も。」

6畳ほどの小さな竹の家だから、扉といっても、竹や木でできているかんたんなもの。外は、まっ暗な闇のなか。扉と窓がしっかりと閉じられると、ぼくはたずねた。

「どうして、閉めたんですか？」

「ディリ インゴン ナト（向こうがわのものたち）が聞いているから。」

「ディリ インゴン ナトって、何のこと？」

すると、隣に座っている人が、ぼくの耳元に口をよせると、そっとささやいた。

「インカント（妖精）。」

「なんで、名前をいっちゃだめなの？」

「だって、自分の名前がよばれたらふりむくでしょう。はいつてきたら大変。だから、妖精の話をするときには、窓も扉もしめるの。あつちの世界に、つれていかれたらどうするの！」

日本で昔話の語りといえは、語りを練習した人に演じてもらったり、絵本で読んでもらう世界なのに、こちらでは身近に生きている本当の世界なのだ。

妖精（インカント）と言う言葉をつかわず、向こうがわのものたち（ディリ インゴン ナト）という隠語をつ



かうのは、実名をつかうと彼らがふりむくからだという。妖精の話をするときには戸や窓をしめるのは、彼らに聞かれないため、彼らが話を聞くと、自分たちの事が話されるとしてはいつてくるし、場合によってはとりつかれて、向こうの世界につれていられる。

向こうの世界につれていられるということは、病気などで死ぬことにはほかならない。

妖精は、かならずしも絵本のような可愛らしいイメージではなく、怖いものだ。

これも実際に体験した話だけれど、アポ山に登ったときに、マノボ族のお父さんが案内してくださった。山頂ま



では、ジャングルをぬけ、川をわたり、3泊ほどかかっただのぼって行く。

マノボ族のお父さんは、綱をしょい、滑る場所になると靴を脱いで裸足でのぼって行く。ところが、尾根にでる手前、そこからアボ山がまじかに望めるところまでくるといった。

「このさきの尾根には野原があって、とつてもきれいな花が咲きみだれている場所です。しかし、ひとつお願いがあるのです。」

「なんですか？」と聞くと、こういわれた。

「花の咲ききれいな野原にでても、ぜったいに、『きれいだな』といっ

ちゃだめ！」

「えっ、なぜですか。？」

「あつちの世界につれていかれるから！」

もう一人のマノボ族の人がいった。

「もう、数人、それをいって、谷から落っこちたりして、死んだり怪我をした人がいる。」

森の中や野原で美しい花の咲く場所にでると、けつして感嘆を声にだしてはならないのだという。

「きれいだな」などというところをい目をして怒られる。なぜなら、そのような場所は妖精がおおくひそんでいて、感嘆すると、その人にとり憑くことがあるから。

妖精はこうおもうそうだ。

「わたしのことを、『きれいだ』といってくれた。あの人をつれていこう。」

こちらの人はこうしたことを、ほんとうに信じて生きている。

あるとき、森のなかにわき出ている水を飲んだ。そのおいしさに感嘆の言葉をはしたら、マノボ族のガイドの人が、あわてて悪霊払いの祈禱をその場でしてくれたこともある。

このような人々がいる地域、またこのような人々の心には、100パーセントお話が生きている。



日本もかつてこのような地域だった。大人たちがカッパや天狗やざしきわらしの話を真顔でしていた。

今では、沖縄や東北のいちぶといつた、田舎にしかみられないけれど。

ぼくが取材した沖縄の宮古の池間島は神ノ島といわれ、日常こうした話が飛びかっていた。

アイヌの人々も、自然界をカムイという、スピリットの世界としてとらえ語りついでいた。

北海道時代、人間を超えた自然界をスピリットとして感じたくて、ときどき一人で山にはいり夜をすごしたりしたが、たしかに人間には把握できない何物かの存在を感じるようにおもえた。冬の支笏湖で夜テントからだと、

月を片手にもってたつ、透明な巨人の姿が見えたときもある。

アイヌのおばあさんにそれを話すと、それはこの世を創った創造神、コタンカラカムイだろうとおっしゃった。

かつてヨーロッパのオーストリアにいたときに、妖精の祭りがあり、居酒屋でまっついていると化け物の姿をした村人たちがはいつてきた。

観光客のなかに、アフリカからきた黒人の男性が一人いたが、扉をあけてはいつてきた化け物を見るやいなや、血相をかえてテーブルのしたに隠れた。

周囲の白人の観光客や村人は、それを見て笑っていたが、アフリカの黒人が隠れたのは、本当に妖精の存在を信じているからで、こうした人々の心のなかには、ちゃんとお話が生きている。



ホボンが語った昔話

### 不思議な場所の物語

「おめでたれにもわかかない

「これぞ、寂しくも静かな場所の常なる  
る物語で、ほとんども知られていない、  
ふしぎな土地の言い伝え。」

「ある日のこと、母を亡くした子が  
た。子は貧しく、いつもまわりの子ども  
たちからなまはすれにされては、いじ  
められていた。

「子はある日、父さんに訪ねた。

「父さん、なぜほくには母さんがいな  
いの。」

「母さんはみずあびが大好きでね、森  
にそれはそれは美しい泉があると聞い  
て、ある日一人で水を浴びに行っただ  
が、それっきり帰ってこないのだよ。」

「母さん、母さんをさがして行ってあげ  
て。」  
「だめだだめだ、とんでもない、そん  
なことをしたらおまえも帰ってこないか  
もしれない。そうしたら、父さんはさび  
しくて死んでしまうよ。」

「でも、父さん、ほくもついても母さ  
んに会いたいよ。そうだ、父さんもいっ  
しょに行こう。」

息子があまり熱心に言うので、父さん  
はしぶしぶ承知して、息子といっしょに  
家を出た。

川にそびてまんまん森のおくへとわけ  
入っていくと、深い谷のおくに、とつせ  
ん見たこともない高い高い山が見えた。  
ふしぎなことに、山を見るなり、子と  
もは顔を輝かせて歩きたじた。

「おいおいおまえ、そんなにおどろい  
て歩くとほいたたいとつしたとつとつだ  
い。」

「父親がふしぎにおもってたずねると、  
子どもは、「あの山のふもとに、幹も枝  
も金でできている大きな大きな木が見え  
るよ。」とつた。

「父さんには何も見えないが、」とつた  
と、

「ほうほうあっちの方だよ、ほんとだ  
よ。」とつた。ずんずん歩きたじた。

ほど不思議なこともあるものとつた、父  
親も半信半疑で、息子についていくと、  
とつせん今まで見たこともない場所に出  
た。

あたりいちめんいろとりどりの花が咲  
き、たぐさんの蝶が飛びまわり、小鳥  
たちがさえずって、この世のものとも思  
えない美しい庭のようだった。

すっかりうれしくなつて、ふたりとも後  
先のこととも考えずに、あちろを見たり  
ちろろをながめたりしながら歩いてい  
ると、いつのまにか日が暮れはじめた。

「これはいけない、とつて父親が、  
「せかしてき母さんはいないよつたじ、

「さあもつ帰ろう。」とつたのだが、ほど、  
とつちかみきて、とつちかみ行つたらよい  
ものやう、すっかり帰り道を思い出すこ  
とができない。

ほどほど困りはてて、倒木にすわつて  
いると、子どもの耳にふしぎな音が聞い  
てきた。

「父さんほう音が聞こえてくるよ、女  
の人の声だよ。」

「父さんにはそんなものは聞こえない  
ぞ。」

ほど、自分には聞こえないのに、息  
子には聞こえるというのもおかしなも  
の、とつちしもの父も怖くなつて、

「いったいどこか音が聞こえてくるもの  
かね。」とつたずねると、

「ほうほうあの木だよ、せんば金でま  
た大きな木からだよ。」とつた。

「父さんにはそんな木は見えないが、」  
とつた。

「変だなあ、あそこには立っているじやな  
い。」

子どもは立ち上がり、しびる父さんの  
手をとつて歩きたじた。すると驚いたこ  
とに、ほんとうに父の目にも大きな木が  
見えてきた。幹も枝も金色にかがやいて  
その美しいこと、あまりのこと、びっ  
くりしてながめてみると、とつせん青  
じがこおるような風が吹いてきて、ま  
と髪の手がさかたつた。

「二人が怖くなってふるえていると、木  
の中からまきとあつるような白い衣をま  
とつた女が出て来た。

「父さん、あれ、たれ。」  
すると女はやさしく微笑んで子どもに  
手をさしのげて言った。

「わたしは母さんだよ。さあ、こつち  
においで。」

とつちつと、ふしぎなことに、天から  
ふりそとく光にすいとままれるやうにし  
て、父と子は大木の梢に吸いこまれて  
消えてしまった。

「これぞ、寂しくも静かな場所の常なる  
ざる物語で、ほとんども知られていな  
しぎな土地の言い伝え。何者であらう  
とも、彼の地に入ったものでもどつたもの  
はいず、帰ったものはいないといつた。

とつちつと、とつちつと天にのぼつた  
ものと思われているが、せめてたれにも  
わからぬ。

「せかしてき母さんはいないよつたじ、



### 講演会、報告会、家庭集会の以来は、松居友へ

mcltomo@yahoo.co.jp (松居友へメール)

電話番号：080-4423-2998 (日本国内から現地に転送・松居友)  
09219603640 (現地携帯電話フィリピン使用・松居友)

まだ支援者のいない子たちです。ここで紹介されている子は、ほんの一部です。  
小学生の里子支援をご希望の方、下記以外の高校大学生を希望の方は、  
直接メールかFAXでも、推薦ご紹介させていただいています！

**メール [mc1mindanao@gmail.com](mailto:mc1mindanao@gmail.com) (現地日本人スタッフ、宮木あずさ)**

Fax 0743 74 6465 (日本窓口、前田容子)

サイトからも検索可能：まだ支援者のない子たちへ！パスワード：mindanao



**Roldan D. Tabay**

高校3年・1996年生  
マノボ族・クリスチャン  
母親がいない  
将来は教師になりたい



**Mark Ryan P. Algofera**

高校1年・2001年生  
カオロ族・カトリック  
両親がダバオに出稼ぎに  
出ているため祖父母と暮らす



**Analiza Sumandang**

高校1年・2001年生  
マノボ族・クリスチャン  
米を買うお金がなく、  
時々三食食べられない



**Marites L. Sabas**

高校3年・1999年生  
マノボ族・クリスチャン  
貧しい家庭  
先生になりたい



**Zurmina A. Kusain**

高校4年・2000年生  
マギンダナオ族・イスラム  
高校を卒業し  
家族の生活を支えたい  
先生になりたい



**Rachel Manib**

高校3年・1999年生  
マノボ族・クリスチャン  
家がなく、地主の家に暮  
らしているが  
教育が受けられない



**Jessibel B. Tula**

高校3年・1999年生  
マノボ族・クリスチャン  
山の貧しい家庭、  
ソーシャルワーカーに  
なりたい



**Zanina A. Edris**

高校2年2003年生  
マギンダナオ族・イスラム  
9人兄弟の8番目  
戦闘の絶えない地域で  
生活は厳しい成績は良い



**Moomen Aliman**

大学1年・1996年生  
マギンダナオ族・イスラム  
母でしか到達できない  
イスラムの反政府地域  
6人兄弟の2番目



**Norhan A. Dawadi**

大学3年・1995年生  
マギンダナオ族・イスラム  
家庭は貧しい  
11人兄弟の3番目  
先生になりたい



**Mugyahid Mangcog**

大学1年・1997年生  
イスラム  
両親はいるが貧しい  
父親は漁師



**Omar P. Monib**

大学3年・1995年生  
マギンダナオ族・イスラム  
家庭は貧しい  
9人兄弟の8番目  
教育学に通う

**振込用紙に、支援したい子の名前を書いて**

**一部振り込んでいただければ、こちらからご連絡いたします。**

**スカラシップ支援希望と書かれている場合は、本部から推薦させていただきます。**

**郵便振替口座番号 00100 0 18057**

**加入者名「ミンダナオ子ども図書館」**

## 野菜売りの少女（連載童話） 浮浪者とストリートチルドレン

ギンギンとクリステインとジョイジョイは、酋長の運転する車にのってMCLまでもどってきた。すでに夕暮れ時で、西の空では夕日が、あかね色のしずくをまき散らしている。草の中から、コオロギやバッタの鳴き声がしきりにする。キョキョキョキョキョと、鳴いているのは、ヤモリ。

浮浪者と7人のストリートチルドレンたちは、アオコイ酋長がしきりに、夕食を子どもたちといっしょにどうですか、と誘うのも断って、帰ることにした。



「そうですね。残念ですね。」  
「でも、またすぐに、お会いすると  
きが来るでしょう。」

浮浪者はそういうと、7人のスト  
リートチルドレンをひきつれて、ミン  
ダナオ子ども図書館をあとにした。

ギンギン、クリステイン、ジョイジョ  
イ、そしてジサやスイツなど、おほ  
ぜいの子どもたちが手をふって見送  
るなか、ストリートチルドレンたちは、  
後ろをふり返っては両手をふり、とき  
どき飛びあがったりして、浮浪者  
のあとについて去っていった。

ミンダナオ子ども図書館を出ると、  
浮浪者たちは、本道を行かずに草地に  
できた小さな脇道に入っていた。マ  
ンゴステインやドリアンやマールンと  
いった、熱帯果樹のあいだをぬけ、果  
樹園のなかを、夕日にむかって歩いて  
いく。

先頭に行くのは浮浪者。その後を一  
列になって、7人のストリートチルド  
レンたちがつづく。ホウキ草の穂や小  
枝を、夕日にむかつてふりまわしなが  
ら、みんなで歌をうたっている。コブ  
シのきいた独特の節回しの歌はマノボ  
語で、まるで日本の演歌か民謡のよう  
だ。

太陽がまっ赤な光をはなつて、黒く  
かげになった木々の向こうに沈んでい

く。

赤い光の最後のしずくが、スイツと  
木々のあいだから消えたとき、浮浪者  
とストリートチルドレンたちの行く手  
に、まっ赤な夕焼け空が広がった。そ  
のとき、不思議なことが起こりはじめ  
た。彼らの姿が、だんだん小さく低く  
なり、少しずつ顔や服がかわりはじめ  
たのだ。

先頭を歩いている浮浪者の顔から  
は、ひげがだんだん消えていき、ボサ  
ボサだった髪の毛も整えられて、いつ  
のまにか頭に茶色の頭巾がはえはじめ  
た。紺色の生地の上には、いちめん  
刺繍が広がり、茶色のズボンにも、見  
事な刺繍がほどこされていった。顔つ  
きも若々しくなり、姿しぐさも、かっ  
ぷくの良いマノボの酋長。

7人の男の子たちの姿も、破れた服  
のストリートチルドレンから、色とり  
どりの服をきた、マノボの少年たちに  
変身していった。まるで、イモムシが  
チョウチョウにふ化するように。

小道はやがて草地をぬけ、一行の行  
く手の夕焼け空に、くつきりファイ  
アーツリーがたった。その下には、黒々  
と大岩が、まるで大男がしゃがんでい  
るかのように浮かびあがってきた。近  
づくにしたがって、その上に、3人の  
小さな妖精たちの姿が見えてきた。カ

ンコンとタクワイとパコパコの妖精た  
ち。

妖精たちは、岩から飛びおりと、  
浮浪者たちを出むかえていった。

「お疲れさま、マオンガゴン酋長。」

「みなさんも、お帰りなさい。」

「まっっていました。」

マオンガゴン酋長は、まるでわが子  
にするように、妖精たちの頭を一人一  
人なでると、みんなで大岩に近づいて  
いった。

そして、そのまま岩の中に消えて  
いった。

同じ日の夕方、ミンダナオ子ども図  
書館では、子どもたちが中心になって、  
戦争で逃げてきた人々を助けに行くた  
めの準備をしていた。

一階では、子どもたちが集まってピ  
ニールシートを広げて切る作業をして  
いる。ロールをころがし、シートを広  
げ、5メートルごとにハサミを入れて  
切っていく。切られたシートは、別の  
子どもたちがおりたたんで、男の子た  
ちがトラックの後ろにつんでいく。ガ  
レージでは、お米の入った大きなサツ  
クを、男の子たちがトラックの荷台上  
のせている。

庭の倉庫の扉が開かれて、なかから  
大きな段ボール箱がいくつも引っぱり  
だされてきた。倉庫から、子どもたち

が運びだしてきた、大きな段ボール箱は、ギンギンにもなんだかわからなかった。でも、開けてみるとビックリ。なんと、たくさんの古着だった。ギンギンとクリステインとジョイジョイは、思わず目を見はった。いつも服がなくて困っている、母さんの顔が浮かんだ。

奥さんのエープリルリンさんが、ギンギンたちを近くによぶといった。「あなたたち、ほとんど着物もってないんでしょ。」

クリステインが、うなずいた。「こちらにいらっしやい。」

この古着はねえ。日本から送られてきたのよ。大事に着てね。」

奥さんは、箱から古着をとりだすと、一人ずつ体に合わせて、服やズボンやシャツをわたしてくれた。

「さあ、残りは、戦争で着の身着のまままで逃げてきて、困っている人たちに持っていきましょう。」

大きな段ボール箱をみんなでかついで、トラックの荷台にのせた。

避難民救済に行くのは、子どもたち。避難民を救済するのも、子どもたち。現地でビニールシートや洋服を渡したり、炊き出しをするのも、子どもたち。準備は、夜遅くまで続いた。

「お休みなさい。」

その夜、ギンギンは、ジサといっしょに、竹のベッドでねた。

### ポアイポアイ村をめざして

翌日、いつものように朝食当番の子どもたちは、朝の4時半に起きた。マキを使って、大きな釜でご飯をたきはじめた。

5時ごろになると、他の子どもたちも皆起きだしてくる。

隣に寝ていたジサにつつかれて、ギンギンも目を覚ました。ジサは、お弁当をつくるやくわり。

ギンギンは、ジサにつれられて、下の台所にいった。ポアイポアイ村にいく、30名の子どもたちとスタッフのお弁当を用意しなければならぬ。ご飯はもう炊けていて、おかずもできあがっている。お弁当箱のかわりになるのは、前日、男の子たちが庭でつんできたバナナの葉っぱ。それを手ぬぐいぐらいの大きさに切って、ご飯をのせる。さらに煮こんだ鶏肉を上においてくるんでできあがり。

「アッチチー。」

ご飯は炊きたてだから、ごわごわしたバナナの葉っぱのうえからさわってもけっこう熱い。他の子どもたちは、



ポーチや玄関や庭を、ホウキではいて朝の掃除をはじめている。トイレの掃除をしている子もいる。畑に出て、植えてあるインゲン豆やトマトの世話をしている子もいる。家でも毎日、マキでご飯を炊いたり、掃除をしたり、小さいときからいろいろなお仕事やお手伝いをしてきた子たちだから、毎日の仕事も軽々とこなしていく。

カンカンカンカン、鐘の音が、ポーチから響いてきた。朝ご飯の準備ができたしらせ。

二階にいつてみると、ながーいテーブルに、子どもたちが遠くまで、ずらーと並んで座っている。その多さに、ギンギンたちは、ビックリ。

近くにいた子どもたちが、教えてくれた。

「どこでも好きなところに、すわっていいのよ。」

「お祈りしてから食べるの。」

朝食がおわると、選ばれた30名の子どもたちとスタッフが、トラックのところに集まった。荷台には、すでに子どもたちが乗りこんで、さけんでい

る。

「行くよーー!」

「はやく乗ってよーー!」

ギンギンとジサは、お弁当のたくさんはあった、大きな袋を二人でかつくと、車のほうへと運んでいった。

「ジサ、ギンギン、お弁当の準備ありがとう」アオコイ酋長がこえをかけた。

子どもたちは、全員大きなトラックの荷台に乗りこんだ。

禿頭の運転手、アウグステインがトラックの運転席にすわり、ピックアップには、アオコイ酋長がのりこんでエンジンのかけた。大きなエンジンの音とともに、おおぜいの子どもの歓声に見送られて、二台の車はミンダオオ子ども図書館を後にした。

目的地のポアイポアイ村は遠い。いくつも山道を越えていかなければならない。田畑の広がる平野をぬけ、谷をわたり、尾根をいくつも横切っていくと、やがて峠から、遠くにアポ山が見えた。

「わーっ、アポ山!」

# Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない  
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも  
はるかに美しいと感じるときだってある。  
けれども、どうにもならないのが、  
たべられないときと、  
お金が無くて学校に行けないとき  
病気になるっても治せないとき・・・



## ミンダナオ子ども図書館支援方法

### 1、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付

直接下記の振替口座をお願いします。寄付をくださった方には年4回、3、5、7、10月に季刊誌『ミンダナオの風』、12月に絵本をお送りしています。

自由寄付は、一番根幹になる寄付です。支援者がまだ見つかっていないにもかかわらず採用した、放っておけない子どもたちの学費、医療費、生活費（MCLは、孤児施設としての許可も得て活動しています）。MCLや宿舎に住んでいる、子どもたちの食費や生活費、ほぼ250名。奨学生以外の子どもたちの医療費。戦争の時の緊急支援費。そして読み聞かせに行った場所で、絵本の無い子どもたちに無償で届ける絵本の制作などに使われます。季刊誌を楽しみにしている方の場合、生活の厳しい場合でも、わずかな寄付でお送りします。不要の方は、ご一報いただければ幸いです。

### 2、植林環境支援・・・6万円（ゴムの木600本、1ヘクタール、現地作業代）

洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、自立支援です。

### 3、保育所・下宿小屋建設支援・・・50万円（簡易保育所）80万円（スタンダードまたは総セメント製）

振り込み用紙の通信欄に「保育所」と書いて振り込んでいただければ、年4回の季刊誌と12月には絵本に加え、毎年10月号には現状を写した写真をお届け。開所式参加や訪問も可能。

### スカラシップ支援

ミンダナオ子ども図書館のスカラシップは、成績よりも親のない子、母子家庭や崩壊家庭の子、親がいても兄弟が多く学校にいけない子を採用の基準とし大学まで通えます。その中の特に何らかの事情で現地に置いておけない子は、本人の希望と保護者の了解で本部に住み、生活を保障。経費には、食費医療費、制服学用品、小遣い、寮下宿代、生活費が入っています。

#### 1、大学生スカラシップ・・・年額70000円（月額5833円）

（大学は、この価格では不可能ですが、自由寄付を不足分に満てています。）

#### 2、高校生スカラシップ支援の方へ・・・年額60000円（月額5000円）

振り込み用紙の通信欄に「大学」または「高校スカラシップ」と書いて、振り込んでいただければ、年四回の季刊誌に同封して本人からの手紙（英語）、5月にスナップ写真、7月に成績表、12月には、絵本といっしょに本人の書いたクリスマス・ニューイヤーカードが届きます。新規奨学生の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。文通やプレゼントも可能です。訪問の際は、自宅にご案内します。

#### 3、里子支援（小学生）・・・年額40000円（月額3333円）

振り込み用紙の通信欄に「里子」と書いて振り込んでいただければ、年四回の季刊誌に同封して、5月にスナップ写真、12月に絵本と本人の書いたクリスマス・ニューイヤーカードが届きます。新規紹介は、随時プロフィールと写真をお届け。訪問の際は自宅にご案内。プレゼントも可能。

詳しくはウェブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館だより」

<http://www.edit.ne.jp/~mindanao/mindanews.htm>

**ゆうちょ振り込み口座 00100-0-18057：加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』**

（インターネットバンキングも可能です） ■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900

■店番 019 ■預金種目 当座 ■店名 ○一九店（ゼロイチキユウ店） ■口座番号 0018057

**スカラシップ・里親に関する質問、現地訪問、季刊誌停止その他に関する問合せは、**

メール [mclmindanao@gmail.com](mailto:mclmindanao@gmail.com)（日本人現地スタッフ、宮木梓〈あずさ〉）

Fax 0743 74 6465（日本窓口、前田容子）

メール：[mcltomo@yahoo.co.jp](mailto:mcltomo@yahoo.co.jp) 電話番号：080-4423-2998（日本および現地転送・松居友）

現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.  
Brgy. Manongol Kidapawan City North Cotabato 9400 Philippines